

第12回大学体育スポーツ研究フォーラム報告

第12回大学体育スポーツ研究フォーラムに参加して

琉球大学 松浦 稜



博士論文本審査会が終わり、ひと段落して怠惰になっていたはずの時期でしたが、指導教員の木内敦詞先生に参加・発表を勧めていただいたこともあり、第12回大学体育スポーツ研究フォーラムに参加しました。今回が初めての参加でした。Zoomによるオンライン開催でしたが、大学体育の研究をするにあたり論文を拝読・引用させていただいた先生が多数いらっしゃって、芸能人に会えたような気持ちでした。

今回のフォーラムでは、開会式ののち、大学体育優秀論文賞受賞講演、中四国支部主催企画と続き、お昼休憩を挟んで、一般発表が9演題（研究報告5演題、事例報告4演題）行なわれました。

大学体育優秀論文賞受賞講演は、「大学体育授業が受講生のメンタルヘルスに与える急性及び慢性効果：エアロビックダンスと器械運動の比較（諏訪部和也先生）」「大学体育におけるこころの準備運動としての「笑い準備運動」の教育効果（藤田恵理先生）」の2演題（大学体育スポーツ学研究第20巻に掲載）でした。2演題とも今後大学体育授業および研究を進めていく上で、厳密な研究プロトコルや具体的でわかりやすい方法の記述、チャレンジングでオリジナリティ溢れる指導内容の実践など、見本とするべき内容が多分に含まれている論文だと、僭越ながら感じました。また、諏訪部先生は、学生時代に所属していた部活の先輩でもあるので、勝手に誇らしい気持ちで講演を聞いておりました。憧れの先輩です。

中四国支部主催企画では、鈴木久雄先生による「アフターコロナの大学体育・スポーツ授業の展開——身体活動増進プログラムのすすめ——」を聴講いたしました。この中では、身体活動に関する国内外の研究と、コロナ禍前とコロナ禍における大学体育授業でのe-Learningを用いた身体活動増進プログラムの取り組みが紹介されました。その中で私自身が1番印象に残っているのは、身体活動実践の継続・習慣化のために「やりたくない時はできることだけやる」ということです。身体活動増進プログラムと聞くと、なるべく

強度の高い運動を続けるという印象を持ちますが、実施者目線に立った取り組み・声かけの必要性を再確認いたしました。なお、コロナ禍前の取り組みについては、「大学体育授業におけるe-Learningを活用した身体活動増進プログラムの効果」のタイトルで、大学体育スポーツ学研究第21巻に掲載されております。

一般発表では、大学体育授業に関する多岐に渡る内容が発表され、大学体育授業研究の更なる発展の可能性を改めて感じるとともに、大変勉強になりました。その中で、私も「大学体育授業時間外の日常身体活動促進の実態：文献調査および質問紙調査から」を発表させていただきました。また、様々な視点から質疑やご指導をいただき、大変勉強になりました。この内容は、タイトルそのまま大学体育スポーツ学研究第21巻に掲載されておりますので、読んでいただけた際には、様々なご意見やアドバイスをいただけると幸甚です。

最後となりましたが、大学体育スポーツ研究フォーラムの開催と運営に携われた方々に感謝申し上げます。大変有意義な時間を過ごせました。また、木内先生、今回参加を勧めていただきありがとうございました。そして、九州地区大学体育連合副会長の田原亮二先生、理事長の福満博隆先生、今回原稿執筆の機会をいただき、ありがとうございました。様々な方に感謝が止まりません。にふえーでーびる。